

# 帚木巻の「つれづれ」

— 『源氏物語』の長編構造の装置として—

都 基 弘\*

---

## 目 次

---

- 一、はじめに
  - 二、いとまありてわざなき時
  - 三、長雨と「つれづれ」
  - 四、場面構成の方法と「つれづれ」の慰め
  - 五、藤壺への思い
  - 六、まとめ
- 
- 

## 一、はじめに

『源氏物語』の帚木巻は、光源氏を聞き手に、頭中将、左馬頭、藤式部丞らが女性論を繰り広げる雨夜の品定めで有名である。その雨夜の品定め導入部は、次のように始まっている。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて、書どもなど見たまふ。〈帚木・五五頁〉<sup>1)</sup>

長雨が続くころ宿直所にいる光源氏の様子を語る文脈であり、「つれづれと降り暮らして」

---

\* 한남대학교. 시간강사. 일본고전문학(중고).

1) 『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注(1994)『源氏物語』新編日本古典文学全集、小学館による。以下、巻名と頁数だけを記し、『新全集』と略称する。なお、『源氏物語』だけでなく他の本文引用においても表記上の問題から一部の表記を私に改めたところがあり、下線は論者のものである。

という表現から始まっている。この表現をめぐって『源氏物語』の注釈書などの研究史においては、前にある「長雨晴れ間なきころ」という表現にひきつけた解釈が主流をなしている。

古注釈書の中で当該の箇所<sup>2)</sup>に注釈を付けたのは、管見による限り『岷江入楚』が初めてで、引用文の傍線部のように文体に注目している。

数日ふりつゝきたる中にとりわき一日ふりくらししめやかなる程のよひの雨なるへしおもしろき体也まことに物語なども一しほおもしろかるへき折節のさまをよくありありとかきいたせり<sup>2)</sup>

このような傾向は『湖月抄』や『源氏物語評釈』などでも見受けられるものである。ただし、『評釈』は「つれづれ」に対し「タイツサウニ」という傍注をつけており、「つれづれ」の主体へ目を向けているのが特徴である<sup>3)</sup>。

しつかなる事也（傍注）、前になが雨晴間なきといへる首尾也数日の中に終日降くらして誠に物語なども一入面白かるへき折節のさまをよくありありと書出せり（頭注）<sup>4)</sup>

「タイツサウニ」（傍注）

「上に長雨はれまなき比とかき出たる脉を再びこゝにあらはして打とけ言の物語をしめやかにせんけしきとせられたるいとめでたし」（頭注）<sup>5)</sup>

時代的には逆になるが、新潮日本古典集成<sup>6)</sup>や新日本古典文学大系<sup>7)</sup>、新編日本古典文学全集<sup>8)</sup>などの現代の注釈書などをみても、当該の箇所に「所在なく降り続く」という注をつけたり訳したりしており、『評釈』の「退屈」説を受け継いでいるように見受けられる<sup>9)</sup>。

ところで、『評釈』によって「いかゞあらん」と不審がられている『源氏物語新釈』<sup>10)</sup>は、下線部にあるように「物を思ひつゝをる」主体の「淋しさ」に注目している。

2) 中田武司編(1980)『岷江入楚』(第一巻)桜楓社、p98。

3) 室松岩雄・保持次・井上頼教校(1920)萩原弘道著『源氏物語評釈』皇学書院、p132。

「つれづれ」の注釈史において「退屈」という語を初めて用いたものとして注目される。「つれづれ」の注釈史を述べる余裕はないので、ここでは本居宣長の「暇(ひま)」説(大野晋校訂(1969)『本居宣長全集』(第四巻)筑摩書房、p324)の延長線上にあることだけを記しておく。

4) 吉沢義則監修(1941)北村季吟著『湖月抄』(第一巻)平楽寺書店、p62。

5) 室松岩雄・保持次・井上頼教校(1920)前掲書、p133。以下、『評釈』と略称する。

6) 石田譲二・清水好子校注(1976)『源氏物語』新潮日本古典集成、新潮社、p46。

7) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注(1993)『源氏物語』新日本古典文学大系、岩波書店、p33。以下、『新大系』と略称する。

8) 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注(1994)前掲書、p55。

9) ただし、校注者によって違ってくる場合もある。例えば、校注者が複数である『新大系』の場合、「所在ない」〈帚木・三三頁〉と、「心の苛立ち」〈東屋・一七一頁〉というふう<sup>1)</sup>にまちまちである。

10) 賀茂百樹校訂(1912)『源氏物語新釈』賀茂真淵全集(第五)吉川弘文館、p4479。以下、『新釈』と略称する。

「つれづれと一つらねつらねといふ事なり良禰の約礼なればつれづれといへり扱つ  
らねつらね物を思ひつゝをるはいとまありてわざなき時の事なれば淋しき意にもいへり

つまり、『評釈』と『新釈』は同じく「つれづれ」の主体へ目を向けながらも「タイツツサウニ」とするか、「物を思ひつゝをる淋しき」とするかの違いを持っている。『評釈』が言うように光源氏は退屈を覚えているかもしれない。そうであると認めてしまうと、当該箇所の前後ひいては雨夜の品定めや帚木巻全体が光源氏の退屈凌ぎになってしまうことになる。このような捉え方では、雨夜の品定めを中心とする帚木巻は藤壺を描くために作られたもので「この三帖（論者注：帚木・空蟬・夕顔）の簡潔な構造が、桐壺から若紫への接続に参与する」<sup>11)</sup>という指摘のような、帚木巻が持つ主題的な長編性が読み取れなくなるのである。

そこで本稿は、当該箇所の前後はもとより雨夜の品定めや帚木巻全体が主題的な長編性を持つものであるという立場から、帚木巻を光源氏の「寂しさ」を慰めるための〈つれづれの慰めの構造〉を有するものとして捉え、「つれづれ」が主題的に選ばれた言葉であることを考察していきたい。

そのために当該場面には用いられていないが、『新釈』に用いられている「いとまありてわざなき時」という表現を「つれづれ」の主体の立場から検討する。そして、「つれづれ」という語の前後の場面構成に注目し、「つれづれ」の場面に「長雨」が用いられている意味を考察する。また、「つれづれ」の場面における「つれづれ」の慰めと物語の長編性との関わりを考察し、最後に、帚木巻において次々と慰めの行動に出る光源氏の「つれづれ」の原因を探ることを本稿の目論見とする

## 二、いとまありてわざなき

『新釈』が用いている「いとまありてわざなき」という表現は、どのような状態を指すのであろうか。『源氏物語』において64例を数える「暇（いとま）」<sup>12)</sup>は、「つれづれ」の場面に用いられることが少なく、次の引用文が唯一の例である。

「暇ありて、つれづれなる心地しはべるに、紅葉もいかにと思ひたまへてなむ。なほたち返り旅寝もしつべき木のもとにこそ」とて、見出だしたまへり。〈手習・三五〇頁〉

妹尼の亡き娘の婿である中将が、今や出家してしまった浮舟がいる小野を訪れ妹尼を相手に話をする場面である。入水自殺が未遂に終わり横川の僧都に助けられた浮舟は、亡

11) 村井利彦(1982)「帚木三帖仮象論」『源氏物語』日本文学研究資料叢書(IV)有精堂、p85。

12) 『源氏物語』の用例検索は、池田亀鑑編(1985)『源氏物語大成』中央公論社による。

き娘の代りに初瀬の観音から授かったものと信じ込んでいる妹尼に引き取られ、小野に移されていた。その自殺未遂から立ち直っていない浮舟に執心するのが妹尼の婿の中将である。その中将が妹尼を訪れ、妹尼との対面で切り出した言葉が下線部の「暇ありて、つれづれなる心地しはべる」であった。この「つれづれ」は一応中将の妻が今はを亡くなっているないので、それと関連付けて解釈することもできる。しかし、「暇ありて」ということは何を意味しているのか前後の文脈を辿ってもわかりづらい言葉である。

それでは、「暇ありて」というのは何なのか。まず、暇という語から考えてみよう。

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。〈桐壺・二一頁〉

桐壺の更衣が里下がりをお願いしているけれども、帝がそれを許さない。この場合、更衣があるので里下がりしようとする帝からの許しが必要であったらしい。このような公的な外出もあれば、私的なものもあるようである。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。〈蓬生・三四四頁〉

花散里のことを思い出した光源氏が紫の上に外出を申し出る場面である。許しは必要ないかもしれないが、妻である紫の上に告げる必要はあったようである。

このように暇（いとま）は、ある場所から離れることを意味し、許可ないしは告知する必要があったと見られる。それでは、暇（いとま）がある場合はどうなるのだろうか。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きこともをせさせたまひなどして、またいたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻寒などやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさをさしたまはず。〈賢木・一四一頁〉

政治的な不遇に見舞われた光源氏が頭中将らと政治的冬を過ごす場面であり、光源氏のところに集まっているのが博士たちであった。時流に乗っていないのであるから時間的余裕があると捉えても差し支えはないけれども、前に「いたづらに」という副詞が付いていることが注意を引く。暇（いとま）がある状態を時間的余裕があると捉えるなら、時間的余裕が無駄にあるということになるだろう。

近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどにはふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。〈薄雲・四三八頁〉

花散里は近くに住んでいるので、ふとしたおりに光源氏の来訪があるという。しかし、光源氏は夜泊まりにならないというのであるから、花散里にとってはそんなに嬉しいことでもあるまい。暇（いとま）の後ろに「あいま」を意味する「ひま」が付いているので、泊まりにならないことが前提になっていると言えよう。暇（いとま）の後ろに「ひま」という語が付く用例がもう一例ある。

今日のやうならむ暇の隙待ちつけて、花のをり過ぐさず参れ、とのたまひつるを、春惜しみがてら、月の中に、小弓持たせて参りたまへ。〈若菜上・一四五頁〉

六条院での蹴鞠が行われてから一緒に帰途についた夕霧と柏木の会話で、夕霧は光源氏が「いとまのひまを見つけて、花の盛りの過ぎないうちに参るようにとおっしゃった」といっている。ここでも暇（いとま）の後ろに「ひま」が付いているので、単なる時間的余裕とは言いにくいだろう。このように、時間的余裕を意味する暇（いとま）がある状態は前後に何かが付いた時、暇（ひま）というニュアンスを帯びてくるように思われる。

それでは、冒頭の引用文における妹尼の婿の中将の「暇（いとま）」の場合はどうように捉えたらよいのだろうか。暇（いとま）は、里下がりや外出など、一定の場から離れることを前提にしていた。したがって、中将という立場上、仕事場である宮廷から離れる時間的余裕を持ったということになるだろう。それに合わせて考える必要があるのが、妻が亡くなって今はいないということである。

つまり、中将の身は閑散になっているけれども、妻が亡くなって傍にいないということからくる「つれづれ」を紛らわさなければならぬ状態に陥っていることである。その意味で、中将の小野行きは「つれづれ」の慰めとして捉えることができよう。妹尼の婿の中将という人物の小野への出現は、浮舟にとっては出家への追い討ちを掛けた疎ましい存在ではあるけれども、中将からすれば「つれづれ」の慰めの営みであったのである。

以上のように「いとまがありて」というのは、単に「ひま」を意味するのではなく、身が閑散になっているのを意味していることになる。そこに「わざなき」ということを合わせると、長雨が降り続くころの宮中なので何の行事もなく光源氏の身は閑散になっていることになる。

そのような光源氏の状態を読み取ったのが『新釈』の「いとまありてわざなき」という注なのであり、妹尼の婿の中将の場合を踏まえると長雨が降り続くころ宮中で物忌みをしている光源氏が何らかの慰めを求めていることを喚起させるものであった。

### 三、長雨と「つれづれ」

「つれづれ」と「雨」との結び付きを見てみると、『源氏物語』における「つれづれ」の

115例のうち11例を数える<sup>13)</sup>。内訳は、長雨3例、夏の雨1例、五月雨2例、時雨2例、春雨1例、雨（春）2例となり、そのうち長雨や五月雨という直接的表現と夏の雨という表現からもわかるように夏の長雨の方が圧倒的に多い。

「つれづれ」と「長雨」が取り合わされるのは、「つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよしもなし」<sup>14)</sup>という『古今集』617番歌以来の伝統である<sup>15)</sup>。藤岡忠美氏は、「つれづれ」という所在ない鬱屈感は、恋人との逢瀬のかなわないことからくるものをあらわし、「ながめ」はそうした恋情のやるせない物思いとともに、逢瀬をさまたげる原因として長雨のあることをあらわしていると指摘している<sup>16)</sup>。ただし、『後撰集』になると「長雨が五月雨をさす例が増えてくる」という指摘からすれば、『古今集』617番歌の「ながめ」を五月雨であると断定しかねる面がある<sup>17)</sup>。『古今集』617番歌収載の『伊勢物語』107段<sup>18)</sup>や『古今集』617番歌にも「ながめ」という語以外には季節を特定できる確証がないのである。唯一の手掛かりとなりそうなのは、『古今集』616番歌の詞書である。

弥生の朔日より、忍びに人にもら言ひて、のちに、雨  
のそほ降りけるによみてつかはしける。在原業平朝臣  
起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとしてながめくらしつ  
〈古今集・恋歌三・六一六〉

13) 池田亀鑑編(1985)前掲書、注12)に同じ。なお、『源氏物語大成』の索引を基にしたという『古典対照語い表』（宮島達夫(1985)笠間書院）には113例となっている。しかし、『源氏物語大成』（第8冊）の「つれづれ」の項を数えてみると114例である。また、『源氏物語大成』の索引にも紅梅巻の用例（第五冊、p1449）が載っておらず、実際の用例数は115例あることになる。

14) 『古今集』の和歌の引用は、小沢正夫・松田成穂校注(1994)『古今和歌集』新編日本古典文学全集、小学館による。

15) 桧垣孝「長雨」（久保田淳・馬場あき子編(1994)『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、p626）によれば、「長雨」に「眺め」が掛けられるのは『古今集』以来のことであり、長雨に閉じ込められて鬱屈してゆく人の心を表現するのに格好の素材として詠まれるようになるという。

16) 藤岡忠美(1989.8)「長雨－和泉式部日記を中心として」『国文学』第二十一巻第七号、p145。

17) 「ながめ」に拘るのは、折口信夫（折口信夫(1965)「古代民謡の研究」『折口信夫全集』第一巻、中央公論社、p488）の「ながめは、ながあめいみから出て固定した語で、五月の「雨期度（あまツゝ）み」と言ふ語がある以上、ながあめいみは、霖雨期に当つての、禁欲・不外出のつれづれを思ひ沁む、成年男子の毎年の経験から来て、ながめと略しても詠る程、広く久しく用ゐられて居たようである。」という「ながあめいみ」と関わるからである。

折口信夫は「五月」としなからも「春のものとしてながめくらしつ」となっている『古今集』616番歌を例として挙げており、五月雨と春の雨とを区別していないところに問題がある。

なお、折口信夫の説を受け『古今集』617番歌の「ながめ」も五月雨の「ながめ」と解している論考としては、西村亨(2000)「王朝びとの夏」『王朝人の四季』（第十九刷）講談社学術文庫、講談社（p130～3）、同(1981)「恋の歌における季節の関与」『新考王朝恋詞の研究』桜楓社（p514～5）などがあり、折口信夫の説を批判した工藤力男(1997.4)「〈月夜の逢会・雨夜の禁忌〉考」『国語国文』第六十六巻第四号（p35～52）も一緒に参照されたい。

18) 片桐洋一・高橋正治・福井貞助・清水好子校注(1999)『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』新編日本古典文学全集、小学館、p105～7。

しかし、詞書には「弥生の朔日」と明記されているので、歌の「ながめ」は春の長雨になる。また、『古今集』の配列では一続きのようになっているものの、『伊勢物語』の107段では617番歌と後続の618番歌との贈答歌となっており、『古今集』の616番歌とは無縁である。

さて、話しを「つれづれ」の場面における「長雨」に戻し、その特徴を見ていくことにしよう。長雨は当該箇所を含めて、長雨3例、夏の雨1例、五月雨2例で計6例を数える(19)。

①夏の雨のどかに降りて、つれづれなるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせて参りたまへり。〈賢木・一四〇頁〉

②やうやう事静まりゆくに、長雨のころになりて、京のことも思しやらるるに、恋しき人多く、女君の思したりさま、春宮の御事、若君の何心もなく紛れたまひしなどをはじめ、ここかしこ思ひやりこきえたまふ。(中略)尚侍の御もとに、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、  
こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」  
さまざま書き尽したまふ言の葉思ひやるべし。〈須磨・一八九頁〉

③五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけてよろづに思しやりとぶらひきこえたまふを頼みにて過ぐいたまふ所なれば、いまめかしう心にきさまにそばみ恨みたまふべきならねば、心やすげなり。〈落標・二九七頁〉

④長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々絵、物語などのすさびにて明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのこともよしありてしなしたまひて、姫君の御方に奉りたまふ。西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読み営みおはす。〈蛸・二一〇頁〉

⑤殿も、こなたかなたにかかる物どもの散りつつ、御目に離れねば、「あなむつかし。女こそものうるさからず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。こらの中にもまことはいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで書きたまふよ」とて、笑ひたまふものから、また、「かかる世の古事ならでは、げに何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。(下略) 〈蛸・二一一頁〉

「つれづれ」の慰めという面から、如上の用例を検討していくことにする。①は、政治の実権を右大臣一派が掌握することになり、舅の左大臣も辞任するなど、光源氏方は政治的不遇の季節を迎えていることが背景になっている。引用文には省略しているけれども、物語では政治的不遇や夏の雨がもたらす閉塞感のなかで中将などが来て韻塞ぎや、その

19) 時雨や春雨なども「つれづれ」と関係があるが、別稿に譲りたい。

負態が行われたことが語られている。

②は、須磨への蟄居を余儀なくされていた光源氏が須磨での生活が落ち着いてから初めて覚える「つれづれ」である。京に残してきた人たちを思い、あちらこちらへ手紙を出すなかで、朧月夜に宛てた手紙の文面において光源氏は「つれづれと～思ひたまへ出でらるる」と言っている。

③は、公私に忙しかった光源氏が花散里を訪れる場面である。

④は、六条院の女性たちが「つれづれ」を慰めるために絵や物語などの遊（すさ）びを営んでいる場面であり、⑤は④を受けての光源氏の発話である。

以上のように、長雨と「つれづれ」が結び付いた場面には、「つれづれ」の主体が「つれづれ」を慰めるために何らかの行動に出るという類型が認められよう。その行動とは、韻塞ぎ（①）、手紙を書く（②）、人への訪れ（③）、絵や物語などの遊（すさ）びを営む（④）ということであり、⑤で光源氏が言っているように「つれづれ」は慰めるべきものであった<sup>20</sup>。つまり、上記の用例は〈つれづれの慰めの構造〉ともいうべき類型をなしているのである。

ところで、当該場面は①の賢木巻との類似が指摘されている<sup>21</sup>。以下、節を変え当該場面と賢木巻の場面とを比較しながら、〈つれづれの慰めの構造〉が物語の長編性を支える装置として選び取られた場面構成の一方法であることを検討していきたい。

#### 四、場面構成の方法と「つれづれ」の慰め

「つれづれ」の慰めと、物語の長編性との関わりを明らかにするために、両場面をもう少し具体的に比較していくことにしたい。

まず、前掲①における光源氏の「つれづれ」は、先述したように光源氏方の政治的不遇を背景にしている。前掲①の前には桐壺院の崩御後の光源氏方への圧迫が詳しく描出されていた。そのなかでも、頭中将と光源氏との関係を描写する次の場面（二節にて引用したことがあるが、再掲する）に注目したい。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもをせさせたまひなどして、また

20) 夙に、清水文雄の「なんらかの積極的行動に出ることによって、慰めまぎらさなければならない」（清水文雄(1965)「物語の女—「待つ恋」と「眺め」—」（『王朝日記』日本古典文学鑑賞講座第六巻、角川書店、p349）や、藤田加代の「「なぐさめられるべき」ものであり、「まぎるる」ことを願い「まぎらす」努力をする対象であった」（藤田加代(1969)「「つれづれ」考」（『高知女子文国文』五号、p49）という指摘がある。

21) 『新全集』頭注6、p140。

いたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻塞などやうのすさびわざどもをもしなど心をやりて、宮仕をもをさをさしたまはず。〈賢木・一四〇頁〉

下線部のように、政治的窮地に追い込まれているなか、漢詩作りや韻塞ぎのような慰みごとに熱中し宮中への出仕を怠っていることが語られているのである。これが光源氏の「つれづれ」と深く関わっていると見るべきであろう。すでに舅の左大臣も辞職しており、出仕してもどうにもならない。光源氏の思う人である藤壺も桐壺院が崩御してから三条宮に移っているので、なおさら宮中は縁の遠いところとなっている。そのようななか、光源氏は有り余る時間を持って余すしかなく、不遇の仲間の頭中將や右大臣の時勢に遅れた博士たちと遊びごとに過ごすことを余儀なくされているのである<sup>22)</sup>。

さて、物語は韻塞ぎの二日後、負態のことを描いた後、朧月夜との密会の場面へと雪崩れ込むことになる。本稿は、前掲①の韻塞ぎや負態を一回目、朧月夜との密会を二回目の慰めと看做す。先述したように「つれづれ」は慰めるべきものであったのに、『源氏物語』の場合は慰められたという用例が一例しかない<sup>23)</sup>。したがって、光源氏の「つれづれ」も韻塞ぎやその負態ぐらいで慰められるはずはなく、また別の慰めを求めることが予想される。前掲①における「つれづれ」は、光源氏にとっては政治的に凄まじい試練を背景にして語られていたもので、優雅な「韻塞ぎ」と負態の酒宴ぐらいでは慰めきれないものであったと見るべきであろう。

つまり、政治的冬の真っ只中にいる光源氏は「つれづれ」が慰めきれず、朧月夜との密会をもって「つれづれ」を慰めようとしたと捉えられるだろう。やがて、この密会は朧月夜の父である右大臣に露顕され、政争の敗者になりつつある光源氏に須磨蟄居という追討ちをかける事件へと展開する。まさに、この場面における〈つれづれの慰めの構造〉は、物語の展開を突き動かす原動力といっても過言ではなからう。

それでは、当該場面はどのように捉えることができるのだろうか。当該場面では、光源氏が書物を見ているという叙述があり、一回目の慰めとすることができる。また、雨夜の品定めにおいて光源氏は聞き手に終始しているけれども、雨夜の品定めも「つれづれ」の慰め

22) この辺りを「貴族的な「つれづれ」を慰む場面の一典型」とみる橋本真理子（橋本真理子(1969. 12)「源氏物語における「つれづれ」についての試論」『平安朝文学研究』第二巻第八号、p. 6)は、韻塞ぎの二日後に行われた負態の折の光源氏の『史記』暗誦などをもって、「権勢を失い、世の中から疎外されたことによる侘しさよりも、上流貴族のプライドと余裕ありげな振舞い」を読み取っている。

しかし、優雅に過ごす上流貴族と捉えるだけでは、やがて起こる朧月夜との密会や、その露顕の場面への繋がりが途切れてしまうのではないだろうか。ここではやはり、政治的な不遇に見舞われ、どうしようもなく遊びごとで明け暮れる痛ましい場面と捉えるべきであろう。

23) 唯一の例が、夕霧巻の「今はいよいよものさびしき御つれづれを、絶えず訪れたまふに慰めたまふことども多かり。〈夕霧・三九五頁〉である。しかし、この「つれづれ」の主体は一条御息所という女性で、自分から慰めようとするよりは、夕霧に慰問される受身な立場に置かれている。

とみることができ<sup>24)</sup>、これを二回目の慰めと看做す。雨夜の品定め翌日、左大臣邸へ退出した光源氏は葵上に妻らしい対応を求めていた。しかし、葵上の態度から「あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる」〈帚木・九一頁〉ので「さうざうしさ」を覚えた光源氏は方違えを口実に紀伊守の邸へ赴き、やがて人妻である空蟬と契ってしまうのである。これを三回目の慰めと看做す。

このように両場面の「つれづれ」には、「つれづれ」を慰めきれない主体が次なる慰めを求める場面構成になっている。「つれづれ」を覚える主体が次なる慰めの行動に出た時、帚木巻で源氏の人妻との淡い恋へと繋がっていき、賢木巻の場合は、光源氏の須磨流離へと繋がっていくのである。

以上のごとく、「つれづれ」を慰めきれない主体が次なる慰めを求めることにより、物語は新しい展開を迎えることになる。そこに参与する〈つれづれの慰めの構造〉は、『源氏物語』の長編性を支える装置として選び取られた方法であったといえよう。

それでは、当該場面において光源氏をして次々と慰めの行動に出させる「つれづれ」は何ゆえのものであったのかを、節を変え考えていきたい。

## 五、藤壺への思い

『評釈』と『新釈』とが同じく「つれづれ」の主体へ目を向けながらも「タイツサウニ」や、「物を思ひつゝをる淋しさ」というふうに相異なる捉え方になったのはなぜなのか。それは「つれづれ」の主体の心境や、「つれづれ」という語の前後に叙述されている主体の環境などをどのように捉えるかによるものであろう。

「つれづれ」という語は「久しきに亘って同じ状態の継続する」という客観的意義と、「さういふ変化の乏しい客観的環境に置かれた主観的な心境」という主観的意義との「主客両面を具へた複雑な意義」を持っているという<sup>25)</sup>。このような点からすると、確かに当該場面の「つれづれ」における主体の心境は捉えにくいところがある。

例えば、光源氏が病のため里下がりしていた藤壺との仲立ちを王命婦に責め密通が起

24) 森正人は〈物語の場〉(森正人(1991)「〈物語の場〉と〈場の物語〉・序説」『説話文学の方法』説話論集第一集、清文堂、p241~3)を説明するにあたり、帚木巻の当該場面を例としてあげている。

しかし、「つれづれ」を「無聊」や「所在なき」と解しているようで、後述するように当該場面における「つれづれ」を藤壺への思いからくる苛立たしさと解していきたい論者としては、賛意を表しかねる。

25) 橋純一(1937.5)「「つれづれ草のつれづれ」を読んで(上)」『国文学解釈と鑑賞』第二巻第五号、p40。

この場面では、「つれづれ」の主体である光源氏の心境を容易に捉えることができる。

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上のおぼつかながり嘆きこえたまふ御気色も、いとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにももうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞわびしきや。〈若紫・二三一頁〉

「かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにももうでたまはず」という表現からは、父帝の心配振りを気にしながらもこのような機会にぜひと思う光源氏の切なる気持ちが看取されよう。そして、「～にも～にも、～にても～にても」という強調表現をもって、藤壺に逢いたいという光源氏の強い気持ちが描出されているのである。そのような切実で強い気持ちを含めているのが「昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ」という表現なのである。

ところで、当該場面の前には「長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなくて」とあり、光源氏は妻である葵上がいる大殿には夜離れがちであることしか示されていない。そして、光源氏が宿直所で「例よりはのどやかなる心地」なので灯火を近寄せて書物などを読んでいたというのが、本文から読み取れる客観的環境なのである。

しかし、上記の客観的環境だけで、光源氏の「つれづれ」を妻の葵の上との夜離れがちであることが原因であると決め付けるのは早計過ぎるだろう。なぜなら、雨夜の品定めの際にも光源氏は藤壺を思っているという叙述があり、後続の巻々に点描される彼女の存在を考え合わせる必要があるからである。

継母の藤壺が光源氏の憧れの人になったのは、光源氏の生母の桐壺の更衣に似ているという「ゆかり」であったからである。藤壺を恋い慕う光源氏の様子は、早く桐壺巻に描出されていた。

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、(中略) 幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。(桐壺・四九頁)

引用文の最後に「いと苦しきまでぞおはしける」とあるように、藤壺を思う気持ちが並々ならぬものであり、「さやうならむ人をこそ見め」というように藤壺は結婚願望の対象としてまで刻印されている。

そして、雨夜の品定め最後には、

君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに、足らず、また、さし過ぎたることななくものしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。〈帚木・九〇～九一頁〉

のように描出されている藤壺への思いも、光源氏の心における藤壺という存在の大きさを窺わせるものである。

さて、桐壺巻には葵上との夜離れがちと関わる二つの情報が叙述されていることを見逃してはなるまい。まず、最初の引用文、帝がいつもお召しになって離さないで「心やすく里住みもえたまはず」という叙述に注目していただきたい。ここで葵上がいる大殿へ退出できない原因は、光源氏ではなくあくまでも桐壺帝の側にあることになる。

ところが、次の引用文では様相が違ってくる。

大人になりたまひて後は、ありやうに、御簾の内にも入れたまはず、御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好まうおぼえたまふ。

〈桐壺・四九頁〉

引用文の最後に「内裏住みのみ好まうおぼえたまふ」とあるように、葵上がいる大殿より宮中で暮らすのを自ら好ましく思っており、「たまふ」という敬語が付いているので、これは光源氏であると考えて間違いないだろう。このように、葵上がいる大殿を敬遠する光源氏の姿は、帚木巻の冒頭にも「まだ中将などにもものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひよしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ」〈帚木・五三頁〉というふうに語られており、桐壺巻での状態が続いていることがわかる。

そして、もう一つ大事なのは、点線部の叙述である。元服後は以前のように御簾の内に入れてもらえなくなり、藤壺とは管弦の吹奏だけで心を通わせ、微かに漏れてくる藤壺の声を慰めとするしかないという現実<sup>26)</sup>に注意しなくてはならない。もはや、藤壺という存在は光源氏が逢いたくても逢えない遠い彼方にあるのである。このような現実があったからこそ、藤壺が病気のため里下がりの時、光源氏の様子を語る表現は「かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにもまうでたまはず」というふうになっていたのである。

それでは、如上のような二つの客観的環境を加えると、当該場面の「つれづれ」はどのように捉えることができるのだろうか。まず、藤壺に逢いたくても逢えない苛立たしさを内包していることが考えられる。それを自分が思う人に逢えないという寂しさとして捉えたいのである。葵上がいる大殿ならいくらでも行ける。しかし、光源氏は如上で見たように、自分から葵上がいる大殿を敬遠しているのである。

また、帚木巻の冒頭には人目を忍ぶ恋がなくもないというふう<sup>26)</sup>に語られているので、そのようなどころに行けない寂しさも考えられる。しかし、いくら長雨であっても逢いたいという気持ちさえあれば逢いに行ける<sup>26)</sup>のに宮中に留まっているのであるから、その可能性はないと言わざるをえない。

このように考えると当該場面の「つれづれ」は、光源氏の頭から離れることのない、逢いたくても逢えない人を思う時の寂しさであると考えるのが妥当であろう。そこに当てはまる人としては、如上で見たごとく藤壺しか考えられないのである。

## 六、まとめ

以上のように、帚木卷の雨夜の品定め導入部に用いられている「つれづれ」という語への古注釈書の注釈を手がかりにし、「つれづれ」の主体が慰めの行動に出るところから〈つれづれの慰めの構造〉を読み取り、それが物語の長編性を支える装置として選び取られた場面構成の一方法であることを述べてきた。そして、帚木卷において光源氏が次々と「つれづれ」の慰めの行動に出る理由を、逢いたくても逢えない藤壺への思いゆえの寂しさとして捉えてきた。

やがて、物語は若紫巻において藤壺の「ゆかり」である若紫（後の紫上）の発見と、藤壺との密通へと展開していく。その両場面にも「つれづれ」という語が用いられており、一見関連性は薄いようにも見える。しかし、光源氏の一生の伴侶の発見と、王権の侵犯という藤壺との密通とが持つ主題的な重みを鑑みると、光源氏の「つれづれ」は二つの出来事と主題的に関わるはずである。「つれづれ」という語の語義から、藤壺を思う光源氏の切なる寂しさを読み取ろうとする所以がそこにある。そうでなければ、若紫の発見や藤壺との密通は光源氏の「所在なさ」や「退屈」を紛らわす過程における単なる偶然の出来事になってしまうだろう。

このように、帚木卷や若紫巻に点在している「つれづれ」を光源氏の藤壺への思いゆえのものとして捉えることは、恋物語としての『源氏物語』の簡潔性を高めることになるのである。

26) 林田孝和(1980)「「ながめ」文学の展開—源氏物語の一構想」『源氏物語の発想』桜楓社、p83。

## 【参考文献】

- 久保田淳・馬場あき子編(1994)『歌ことば歌枕大辞典』角川書店
- 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注校注(1994)『源氏物語』新編日本古典文学全集、小学館
- 池田亀鑑編(1985)『源氏物語大成』(第八冊)中央公論社
- 石田讓二・清水好子校注(1976)『源氏物語』新潮日本古典集成、新潮社
- 大野晋校訂(1969)『本居宣長全集』(第四卷)筑摩書房
- 小沢正夫・松田成穂校注(1994)『古今和歌集』新編日本古典文学全集、小学館
- 片桐洋一・高橋正治・福井貞助・清水好子校注(1999)『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』新編日本古典文学全集、小学館
- 賀茂百樹校訂(1912)『源氏物語新釈』賀茂真淵全集(第五卷)吉川弘文館
- 中田武司編(1980)『岷江入楚』(第一卷)桜楓社
- 宮島達夫(1985)『古典対照語い表』笠間書院
- 室松岩雄・保持照次・井上頼教校(1920)萩原弘道著『源氏物語評釈』皇学書院
- 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注(1993)『源氏物語』新日本古典文学大系、岩波書店
- 吉沢義則監修(1941)北村季吟著『湖月抄』(第一卷)平楽寺書店
- 折口信夫(1965)「古代民謡の研究」『折口信夫全集』第一卷、中央公論社
- 工藤力男(1997.4)「〈月夜の逢会・雨夜の禁忌〉考」『国語国文』第六十六卷第四号
- 清水文雄(1965)「物語の女―「待つ恋」と「眺め」―」(『王朝日記』日本古典文学鑑賞講座第六卷、角川書店)
- 橋純一(1937.5)「「つれづれ草のつれづれ」を読んで(上)」『国文学解釈と鑑賞』第二卷第五号
- 西村亨(2000)「王朝びとの夏」『王朝人の四季』(第十九刷)講談社学術文庫、講談社
- 同(1981)「恋の歌における季節の関与」『新考王朝恋詞の研究』、桜楓社
- 橋本真理子(1969.12)「源氏物語における「つれづれ」についての試論」『平安朝文学研究』第二卷第八号
- 林田孝和(1980)「「ながめ」文学の展開―源氏物語の一構想」『源氏物語の発想』桜楓社
- 藤岡忠美(1989.8)「長雨―和泉式部日記を中心として」『国文学』第二十一卷第七号
- 藤田加代(1969)「「つれづれ」考」『高知女子文国文』五号
- 村井利彦(1982)「帚木三帖仮象論」『源氏物語』日本文学研究資料叢書(IV)有精堂
- 森正人(1991)「〈物語の場〉と〈場の物語〉・序説」『説話文学の方法』説話論集第一集、清文堂

## 要 旨

本稿は、帚木卷の雨夜の品定め導入部に用いられている「つれづれ」への古注釈書の注釈を手がかりにして、帚木卷に光源氏の「寂しさ」を慰めるための〈つれづれの慰めの構造〉が有するものとして捉え、「つれづれ」が主題的に選び取られた言葉であることを考察してきた。

「つれづれ」という言葉は、『源氏物語新釈』と『源氏物語評釈』との捉え方からもわかるように、捉え方によって語義が違ってくるものである。前後の文脈をどれだけ考え合わせるかによって語義は異なってくる。とくに「つれづれ」という言葉は、『古今集』や『伊勢物語』という平安時代初期の文献から見えはじめているけれども、『源氏物語』の書かれた平安時代の初期には慣用化が進んでしまい、語義が捉えにくくなっているのである。

本稿は、「つれづれ」という言葉が持つ語義はもとより、この言葉が平安時代の文芸作品の形成において果たす役割を見つけ出そうとする試みの一つである。

キーワード：「つれづれ」、長雨、光源氏、藤壺、方法、長編性、帚木卷

투 고 : 2007.11.30  
1차 심사 : 2007.12.08  
2차 심사 : 2007.12.29

住 所 : (300-835) 대전시 동구 홍도동 10-2 공원빌라 203호  
電 話 : 010-3432-5662  
e-mail : miyako101@yahoo.co.kr